



ナメクジは、どこでどのようにふえるの

ナメクジは、雌雄同体の生き物

ナメクジは、カタツムリと同じ仲間^{おな なかま から たいか}で、殻^{から}が退化^{たいか}してなくなってしまったのです。ナメクジもカタツムリも、1匹^{ひとひき}の体^{からだ}の中^{なか}に、オスとメスの両方^{りょうほう}のしくみ^{しくみ}をもっている、雌雄同体^{しゆうどうたい}の動物^{どうぶつ}です。でも、1匹^{ひとひき}だけでは、子孫^{しそん}を残^{のこ}せないようになっています。

今^{いま}いる、ほとんどの動物^{どうぶつ}が、お母さん^{かあ}とお父さん^{とう}の両方^{りょうほう}から遺伝子^{いでんし}（親^{おや}の体質^{たいしつ}や性質^{せいしつ}を伝えるもの^{つた}）をもらって、病気^{びょうき}にたいする強さ^{つよ}や、いろいろなちがう性質^{せいしつ}を受けつぎ、環境^{かんきょう}の変化^{へんか}や病気^{びょうき}に負けず^まに、生きのびてきました。1匹^{ひとひき}の体^{からだ}の中^{なか}のオスとメス^{しそん}どうしで子孫^{しそん}を残^{のこ}すと、親^{おや}の悪い体質^{わるい たいしつ}などがそのまま^{つた}伝わ^{つた}っていき、その動物^{どうぶつ}はほろびることが多い^{おほ}のです。ですから、カタツムリ^{なかま}の仲間^{べつ}も、別^{べつ}のカタツムリ^{こうび}と交尾^{こうび}をして卵^{たまご}を産^うみます。

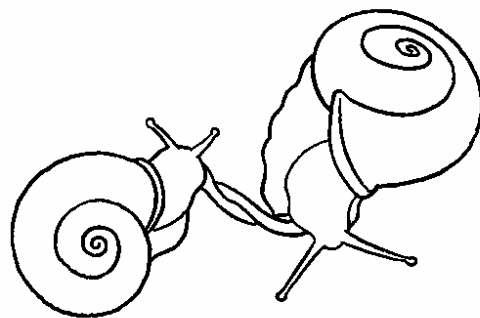
ナメクジはみな、お母さんになる

ナメクジもカタツムリも、交尾^{こうび}や産卵^{さんらん}の方法^{ほうほう}は、ほとんど^{おな}同じ^{おな}です。

これらは、触角^{しゅっかく}の後^{うし}ろのへん^{へん}に、交尾^{こうび}をするためのあな^{あな}があります。2匹^{ふたひき}のナメクジは、頭^{あたま}を寄せ合^よい、細^{ほそ}い管^{くだ}を相手^{あいて}の体^{からだ}にのばし、おたがいにオスの遺伝子^{いでんし}（精子^{せいし}）を相手^{あいて}にわたします。そして、それぞれが、お母さん^{かあ}になり、交尾^{こうび}のとき^{とき}のあな^{あな}から産卵^{さんらん}します。

落ち葉^{おちば}や石^{いし}の下^{した}に50個^ごぐらい、白^{しろ}い球形^{きゆうけい}の卵^{たまご}を産^うみます。卵^{たまご}がかえると、親^{おや}と同じ^{おな}形^{かたち}の小さい子^{ちい}ナメクジ^こが出てきます。

（監修・今泉 忠明）



おたがいに精子を送る管をさしこむ、カタツムリの交尾

